

# 令和4年度 大津・南部地域 普及活動実績集



滋賀県大津・南部農業農村振興事務所農産普及課  
(大津・南部農業普及指導センター)  
令和5年(2023年)3月

※本実績集は当課のホームページでご覧になれます。  
<http://www.pref.shiga.jp/kusatsu-pbo/nogyo/index.html>



## ■表紙写真紹介■

～日頃の普及指導員の活動の一端を紹介しています～

【左上写真】(p.4)  
『大津トマト現地検討会』

【右上写真】(p.23)  
『リンドウ研修会』

【左下写真】(p.19)  
『びわこいちご目合わせ会』

【右下写真】(p.17)  
『ナシ接ぎ木研修会』

## はじめに

生産者の高齢化など農業就業人口の大幅な減少、気候変動や災害の発生や資材の高騰など、農業・農村を取り巻く状況は不安定さが増す中、本県農業を持続的で、生産性の高い、力強いものにしていくことが求められています。

このような中において、ICT 技術や環境制御技術の著しい進歩を活用した、省力化や収量・品質の向上など生産性の高い農業の新たな展開や、消費者ニーズに即した農産物の生産が進められています。

当課では、持続的で生産性の高い農業の展開や農村の振興を図るため、①「担い手の育成と経営の強化(人づくり)」、②「産地の育成と販売力の強化(産地づくり)」、③「持続可能で魅力ある農業・農村の振興(地域づくり)」の3つの柱をもって、普及指導活動の基本である、農業者の皆様に直接接し、支援する活動を関係機関の方々とともに進めてまいりました。

具体的には、①ICT技術等を活用した栽培技術支援、②新規就農者支援、③担い手の経営力強化支援、④産地づくり支援や⑤集落での話し合いの促進などに取り組みました。

この実績集は、一年間の普及指導活動の成果をまとめたものです。御協力いただきました方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後の地域農業を振興するための資料として活用していただければ幸いです。

今後も、都市近郊である大津・南部地域の特性を活かし、時代の要請と地域のニーズに対応した普及指導活動を進めてまいりますので、御理解と御協力をいただきますようお願い申し上げます。

令和5年(2023年)3月

滋賀県大津・南部農業農村振興事務所

次長(兼農産普及課長) 住谷 一樹

# 目次

## 普及活動成果事例

### I. 担い手の育成と経営力の強化

#### (1) 競争力のある担い手の育成

- ① 複合経営の実現による地域モデルの確立 ..... 1
- ② 土地利用型大規模経営体における園芸部門定着支援 ..... 2
- ③ 草津市たまねぎ部会への腐敗・病害対策と育苗支援 ..... 3
- ④ ICTバルブを活用した高温対策と技術共有によるトマトの収量向上 ..... 4
- ⑤ 飼料用米の単収向上による収入の増加 ..... 5
- ⑥ 葉ねぎの安定生産を目指して ..... 6
- ⑦ いちじくの栽培技術習得による収量の向上 ..... 7
- ⑧ ナシ栽培の新技術導入支援 ..... 8
- ⑨ 管内青年農業者クラブの活動支援 ..... 9

#### (2) 土地利用型水田作経営の強化

- ⑩ 集落営農法人における営農体制の改善と作物栽培の収量向上 ..... 10
- ⑪ 大豆の早播きによる収量向上を目指して ..... 11
- ⑫ 経営体における大麦・大豆の収量向上と連携 ..... 12
- ⑬ 環境こだわり基準における水稻「紋枯病」の有効な防除体系の確立 ..... 13

#### (3) 新規就農者の確保・育成

- ⑭ 新規就農者に向けた支援 ..... 14
- ⑮ 経営開始に向けたモリヤマメロンの栽培技術習得支援 ..... 15

### II. 産地の育成と販売力の強化

#### (1) 競争力を持つ稲・麦・大豆の産地育成

- ⑯ 小麦新品種「びわほなみ」への円滑な転換による収量・品質の向上 ..... 16

#### (2) 多様な園芸産地の育成

- ⑰ 参入法人の経営安定を核とした産地活性化 ..... 17
- ⑱ モリヤマメロンの出荷率・品質の高位平準化 ..... 18
- ⑲ イチゴの共同販売組織の安定化 ..... 19
- ⑳ 草津メロン部会生産者への栽培技術支援 ..... 20

### III. 持続可能で魅力のある農業・農村の振興

#### (1) 担い手を支える集落の仕組みづくり

- ㉑ 吉川中瀬地区の畑地貸借条件の明確化 ..... 21

#### (2) 地域資源を生かした魅力ある農村の創出

- ㉒ 特産物野菜生産を阻害する野生鳥獣総合対策 ..... 22
- ㉓ リンドウ栽培技術の習得支援 ..... 23

### トピックス

- 全国初の「グリーンファーマー」認定 ..... 24
- 滋賀県育成イチゴ品種「みおしずく」 ..... 25
- 「人・農地プラン」から「地域計画」への円滑な移行を目指して ..... 26
- 栗東チャレンジ農業塾 イチゴコース開講 ..... 27
- みどりの食料システム戦略～グリーンな栽培体系への転換サポート事業～ ..... 28
- 経営支援アドバイザー派遣制度の活用 ..... 29

### その他

- 表彰事業 受賞者の紹介 ..... 30
- 発信情報 ..... 31

# 複合経営の実現による地域モデルの確立

## 【普及活動のねらい・対象】

A農園は直売をメインとする大規模土地利用型経営体です。コロナ禍による米需要の減少などにより米価が低迷する中で、大麦収穫後の飼料用米と園芸品目であるブロッコリーの面積拡大を組み合わせた複合経営による地域モデルの確立を目指して取り組みました。

## 【普及活動の内容】

### ①大麦栽培後の飼料用米栽培体系の導入

大麦播種予定のほ場では水稻の中干し時期に一度しっかり田面を干すなどの排水対策の徹底を促しました。また、収穫後スムーズな飼料用米移植作業の段取りについて5月頃から事前に検討しました。

### ②ブロッコリーの安定収穫

40a程度から1haに栽培面積を拡大されたこともあり、作型の分散のために品種の選定と播種時期をずらす提案をしました。また、肥料高騰の観点から緑肥作物であるヘアリーベッチを基肥とするほ場を準備し、経費を削減しつつ安定生産に努めるよう提案しました。

## 【普及活動の成果】

大麦の栽培面積の拡大(2ha→5ha)に伴い、拠点となるほ場から北へ車で約20分離れたほ場では生育に差ができ、防除時期の判断が困難でしたが、効果的な赤かび病防除のために散布を2回に分けるなど適切な作業が実施されました。しかし、排水が悪いほ場もあり、大麦の単収は306kg/10aと目標の360kg/10aに届きませんでした。一方で、飼料用米は450kg/10aと昨年の474kg/10aに近い安定した収量を達成しました。今後は経営のバランスを考慮して、大麦→飼料用米の比率を縮小し、麦大豆の比率を拡大し地域にあったほ場(砂地、排水の良い土地)で栽培していくことになりました。

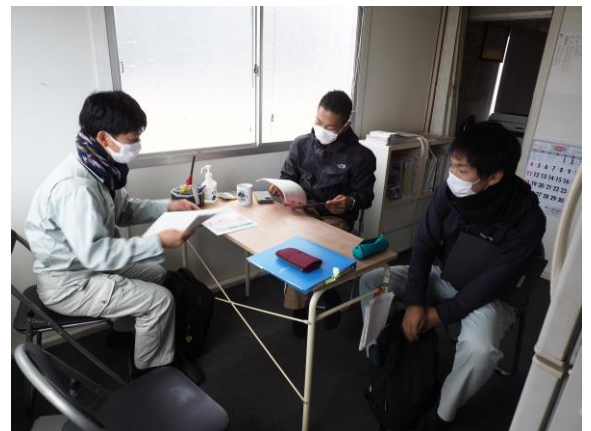


写真 A氏と経営について相談中

また、ブロッコリーについては栽培面積が1haに大幅に拡大されましたが、1回目の定植時のかん水不足による活着不良、2回目の定植前の苗の生育不良により、早生品種を中心とした年内販売のみになりました。目標販売金額である80万円は達成しましたが、初期の散水チューブによる十分なかん水による活着促進や育苗技術の向上など新たな課題が見えてきました。

## ◎対象者の意見

次年度は底面給水を導入し今作の失敗を改善したいです。引き続き支援をお願いします。

(A氏)

## 土地利用型大規模経営体における 園芸部門定着支援

### 【普及活動のねらい・対象】

イチゴ栽培部門を導入された野洲市の土地利用型大規模経営体を対象に、イチゴ栽培技術を取得することで園芸部門が定着できるよう支援しました。

米価の低迷などにより、土地利用型農家が園芸部門に取り組む事例が増えています。対象農家が、園芸担当者を設置し、当課へ技術習得支援の要請をしたことから、土地利用型農家における園芸部門が定着するモデルとなることをねらいとしました。



写真1 園芸担当者による管理作業

### 【普及活動の内容】

対象は前年園芸担当者が不在であったことからイチゴの苗はすべて購入されていました。この方法では費用が掛かりすぎるため、定植用の苗を自ら増殖することで費用を抑える育苗技術の他、病虫害防除、養液管理、温度管理、芽数管理、摘花、訪花昆虫管理などのイチゴ栽培の基本技術を指導し、法人内の役割分担と情報共有について支援を行いました。



写真2 苗の増殖

### 【普及活動の成果】

苗を自ら増殖することで、種苗費を約150万円から約3万円へ低減することができました。また、園芸担当者や代表者が日々作業し、観察することで病虫害の発見が早くなりました。このことにより、栽培中に発生した病虫害の対策を早期に実施し、被害を最小限に抑えることができました。今後は、12月2日から開始された収穫販売について適切に支援を続けます。

### ◎対象者の意見

育苗がうまくできました。12月に今までにない大きなイチゴが採れて満足しています。これからもイチゴ栽培の部門が安定するよう指導をお願いします。 (代表者 B氏)

## 草津市たまねぎ部会への 腐敗・病害対策と育苗支援

### 【普及活動のねらい・対象】

草津市の土地利用型経営体4戸は、収益確保、労働力の有効活用のためタマネギ栽培に取り組んでいます。しかし収益性の確保が難しく、経営上のメリットが低くなっていました。そこで課題である病害対策・育苗を成功させ、収量を向上させるため、JAレーク滋賀と連携して技術支援を実施しました。



写真 根切りの済んだタマネギ

### 【普及活動の内容】

#### (1) 腐敗球発生対策(令和4年産)

令和3年産では灰色腐敗病により、貯蔵中に腐敗が発生する事態となりました。令和4年産では腐敗対策と需要変化への対応のため、加工業務用の大玉化の管理から青果向けに肥大を抑えた施肥・株間とし、さらに収穫前の灰色腐敗病の防除が実施されるよう支援しました。また、ほ場乾燥の際、根切りのみを行い貯蔵性を上げる方法を提案しました。

#### (2) 育苗支援(令和5年産)

令和3年産で部会長の協力のもと改善されたかん水管理について、継続されるよう巡回により確認し、助言を行いました。また、セルトレイ育苗であることから肥料不足が多く見られたため、施肥状況についても随時確認し、助言を行いました。

#### (3) 栽培暦改定(令和5年産)

令和4年産は令和3年産と比較して病害発生・腐敗が少なかったものの、一部べと病の越年罹病株による被害が発生し、生育株数が減少したほか、生き残った株の過剰肥大による割れなどが発生しました。そこで、令和5年産に向けて、育苗期間中のべと病予防剤の再選定と、治療剤散布の追加を提案しました。

### 【普及活動の成果】

令和3年産で問題となっていた腐敗の発生について、令和4年産ではクレームが0件となり被害軽減が達成されました。収量は平均で約3.9t/10aとなり前作から1t近い増収となりました。また、玉サイズについてもL玉が大多数となり、出荷規格に合うタマネギが生産されました。一方で、育苗について、かん水管理は問題ありませんでしたが、別要因によると見られる発育不良が多発し、自家育苗率が大幅に下がった生産者もありました。育苗ハウス内の温度管理等が要因の一部と考えられ、次作に向けての課題となりました。

#### ◎対象者の意見

タマネギの収量を得ることができ自信につながりました。育苗について課題が多く見つかったため、次作に向けて対策支援をお願いします。(生産者)

# ICTバルブを活用した高温対策と 技術共有によるトマトの収量向上

## 【普及活動のねらい】

大津市内には少量土壌培地耕で大玉トマトを生産する生産者が点在しています。各自が直売や直売所への出荷を主に行っており、生産者間の交流はほとんどありませんでした。そこでICTバルブの活用による高温対策技術を導入および生産者間で技術を共有する場を設けることで、栽培技術向上による地域全体の収量向上を目指しました。

## 【普及活動の内容】

### ①ICTバルブを活用したミスト散水

5月上旬にミスト散水の試運転を行い、抑制栽培が始まる8月中旬に定植初期の萎れ対策として1戸の生産者にミスト散水のアプリの導入と稼働を促しました。

### ②現地検討会の開催

生産者同士がハウスを訪問し、現地検討会を開催することで、ミスト散水の稼働状況や天敵の活用について話し合う場が形成されました。

## 【普及活動の成果】

今年の夏は8月18日の定植後に猛暑日が続きましたが、ICTバルブを活用した連続ミスト散水は実施されませんでした。原因は、ミスト実証農家のミスト散水による葉の濡れと病気の誘発への不安が大きかったからだと考えられます。しかし、不安が大きいため、ミスト実証農家はハウス内の環境やトマトの草姿を観察・把握することの重要性を理解され、数値と経験を合わせた管理を行われるようになりました。



写真 ミスト散布稼働時間について説明中

現地検討会は抑制栽培時の11月に開催しました。ミスト散水の話題以外にもベテラン農家のハウスでコナジラミ対策として導入されている天敵タバコカスミカメについて、使用方法やほ場での飼育方法等について意見交換が行われました。ミスト実証農家も天敵について関心が高く、新たな知識を得られたようです。

今後も地域間の交流を絶やさず、新たな技術による収量向上への支援を続けていきます。

## ◎対象者の意見

ミスト散水は陰りやすい中山間では活用が難しいと感じました。現地検討会で天敵に興味を持ったので温存植物を活用してIPMにも取り組んでみたいです。 (ミスト実証農家)



## 飼料用米の単収向上による収入の増加

### 【普及活動のねらい・対象】

大津市のCファームは、大津市北部の土地利用型経営体であり、中山間に位置する耕作不利益地も数多く管理され、地域農業の中心的担い手として期待されています。対象は、従来から主食用米品種を活用して飼料用米の生産に取り組み、地域の養鶏農家に供給を行ってききましたが、平均単収は398kg/10aと低迷していました。

その原因は、砂質で肥料保持力が弱いにもかかわらず、倒伏を恐れて必要な肥料を供給できていないことでした。そこで、耐倒伏性に優れ、高収量を実現可能な飼料用米専用品種「みなちから」を導入することで、単収向上を実現し、収入増加につながるよう支援を行いました。

### 【普及活動の内容】

「みなちから」の窒素吸収力に合わせた施肥設計を提案しました。また、対象の求める作業の省力化も考慮し、追肥作業を軽減するために、元肥一発肥料の活用を提案しましたが、肥料の溶出が遅かったため、追肥の削減はできませんでした。収量向上には、穂肥のタイミングが重要であったため、対象と生育状況を確認し、適期散布の実現につなげました。また、穂肥・実肥の実施は、労力軽減のためJAと連携し、大型ドローンによる施肥作業の実施を提案しました。収穫後には、収量調査結果をもとに振り返り、初期の生育不良が課題となることを対象と共有し、次年度に向けた施肥設計と栽培スケジュールを提案しました。



写真1 大型ドローンによる肥料散布



写真2 対象と関係機関による振り返り

### 【普及活動の成果】

「みなちから」の単収は655kg/10aとなり、地域の平均単収を150kg/10a以上上回りました。水田活用直接支払交付金は10.5万円の上限額を交付されることとなり、主食用米以上の収益となりました。ただし、化学肥料中心の肥料体系であり、肥料高騰の影響を受けるため、次年度は、飼料用米を供給している養鶏農家の堆肥を活用するなどの耕畜連携に係る取組を積極的に進め、更なる収入の増加に向けた支援を継続していきます。

### ◎対象者の意見

今後は飼料用米専用品種の割合を更に増やし、収益向上につなげていきたいです。

(Cファーム代表)

## 葉ねぎの安定生産・出荷をめざして

### 【普及活動のねらい・対象】

対象の栗東市D氏は、ハウスで葉ねぎを周年栽培されています。

2年前に他市にハウスを増設され面積が5940㎡増え、合計14,075㎡となりましたが、収穫適期を逃したこと、病害発生により収穫できず、すき込むねぎが多かったことから思うように出荷量が伸びていない状況にありました。

そこで、現状の問題点や課題を共有し、改善に取り組みました。

### 【普及活動の内容】

定期的にはほ場を巡回し、生育状況や病虫害発生状況を確認するとともに、月1回程度、出荷状況などを共有し、今後の改善点を検討しながら進めました。

4月～8月は生育が進みやすく、収穫量が増える時期なので、適期収穫ができていないかを中心に確認を行い、収穫が遅れている場合はその原因について検討しました。

9月以降は、冬期に向けて定植棟数を増やす時期なので、計画どおりに定植が完了しているかの確認を行いました。また、昨年度は葉ねぎの生育を進めるためにハウスを閉めた管理をしたことで、ハウス内の湿度が高まり、黒腐病が多く発生しました。そこで、今年度については、早めに定植を完了することで、ハウスを開放した管理とし、病気の発生を抑えるよう提案しました。

### 【普及活動の成果】



写真2 生育中のネギ

思った以上に葉ねぎの生育が進んだことや、出荷調製作業の人員不足から、一部収穫ができないハウスがあったものの、適期収穫を意識して作業できたことで、昨年度に比べると10%程度出荷量を増やすことができました。

また、葉枯れ症状の発生やアザミウマによる被害は見られましたが、冬期の黒腐病については、温湿度管理を改善したことから現時点で発生は見られませんでした。

次年度からは、土づくりも実施しながら、現状のハウスと労力で最大限出荷量を確保できるよう継続して支援を行っていきます。



写真1 黒腐病発病株(昨年度)

### ◎対象者の意見

栽培管理等の全体的な見直しに協力して頂いた事で、病気が減り農薬使用量が削減でき、洗浄計量結束作業もスムーズになり安定した出荷量へとつながりました。改善に協力してもらった事で、思い切った管理に踏み切れた事はとても大きい部分でした。(D氏)

# いちじく栽培技術習得による収量の向上

## 【普及活動のねらい・対象】

栗東いちじく生産組合のE氏は、令和2年度に栗東チャレンジ農業塾のいちじくコースを受講し、昨年度からいちじく栽培に取り組まれています。昨年度は害虫被害やハウス2棟(620㎡)を一人で管理されていることによる収穫の遅れなどがありました。そこで、いちじくの栽培管理技術の習得支援および収穫・調製作業の改善点の提案を行いました。

## 【普及活動の内容】

(1) 栽培管理および病虫害防除技術の習得支援

春先の芽かきから始まり、誘引、摘心などの栽培管理について、現地で実演を交えて説明しました。病虫害については特にアザミウマ類、ハダニ類の発生状況を確認し、適期に防除を実施するよう指導しました。

(2) 収穫・調製作業の改善点の提案

ほ場の足元が悪く、台車の利用や移動が困難であることが収穫が遅れている原因の1つでした。そこで、トタン板を敷くなど畝間の状態を改善するよう提案しました。また、時期別の収穫量を提示し、必要となる雇用労力を明らかにしました。



写真 ほ場状態の改善が行われた  
いちじくハウス

## 【普及活動の成果】

栽培技術を習得され、各栽培管理作業を適期に実践された結果、目標収量の4t/10a を達成し、昨年度と比べて約1.5倍に増加しました。病虫害防除については、適期に防除が実施されたことで被害はほとんどありませんでした。

ほ場状態が改善されたことおよび収穫量に合わせた人員を確保できたことで、収穫・調製作業の効率が上がり、収穫遅れによるロスを減らすことができました。

## ◎対象者の意見

収穫・調製作業の改善ができたことで、目標収量を達成できて満足しています。今後も安定して収量を確保していきたいです。 (E氏)

## ナシ栽培の新技术導入支援

### 【普及活動のねらい・対象】

(株)F農園は野洲市の果樹経営体です。早期成園化および省力化に資する新技术「ナシ樹体ジョイント仕立て」の導入に向けて、昨年度ナシの新植を行われました。ポット育苗によるジョイント仕立ての導入事例はありましたが、今回対象が取り組まれた大苗育苗を省略してほ場に直植えする方法は県内で初めてとなります。そこで、対象の条件に適したジョイント仕立ての導入支援を行いました。

### 【普及活動の内容】

主枝を隣接樹に接ぎ木できる長さまで伸ばす必要があるため、新梢伸長に向けたジベレリン処理について、実施時期や方法について説明しました。通常条件でも重要となるかん水や施肥の適期実施についても説明し、その重要性を理解されました。

また、強風による伸長停止や枝折れ等の被害が出ないように、段階的な誘引の実施を提案しました。



写真1 ジベレリン処理が行われた新梢

### 【普及活動の成果】

生育の順調だった品種において、約8割の樹で目標とする新梢長2mを達成しました。新梢長が十分足りている品種については来春に接ぎ木を行い、不足している品種については来春に再度伸長させ、夏期に接ぎ木を行うよう提案しています。



写真2 夏期の主枝伸長状況

### ◎対象者の意見

順調に新梢長を確保できました。成園化に向けて、引き続き支援をお願いします。

(代表者 F氏)

## 管内青年農業者クラブの活動支援

### 【大津地域青年農業者クラブ<sup>きらり</sup>季楽里の活動支援について】

同クラブは毎年、大津市立木戸小学校と連携して食育教育を行っています。農業体験を通して、食べ物大切さを学んでほしいとの思いから、20年にわたり体験授業を行ってきました。今年度は、3年ぶりの田植と稲刈り体験に加え、新たに振り返り授業を設け、子供たち自身で農業機械や米の種類など、興味を持ったことを調べて、新聞にまとめて発表してもらいました。子供たちからは多くの質問が出され、農業や食べ物について学習をより深めてもらうことができました。

また、クラブ員の農産物を多くの方に知ってもらうため、大津プリンスホテルと連携した農産物マルシェや、地元のマルシェに複数回にわたって取り組みました。

当課は、毎月開催される定例会議に参加して、これらの活動の打ち合わせや資料の作成、当日の運営を支援してきました。



写真1 振り返り授業の様子



写真2 農産物マルシェの様子

### 【南びわこ青年農業者連合会の活動支援について】

同連合会は今年度、クラブ員が生産した地場産農産物の展示・販売を通じた、地域農業の紹介や消費者との意見交換を目的として、5年ぶりに草津市駅前広場にて農産物マルシェを開催しました。立ち寄った方からの「この野菜はどう調理するのがおすすめ？」などの質問にクラブ員が答え、消費者との交流を行うことができました。また、パンフレットやSNSでクラブ活動について紹介し、地域の青年農業者についても関心を持ってもらうことができました。

当課では企画の準備、当日の運営の他、県内外の先進経営体への視察や勉強会、経営上の課題解決に取り組む“プロジェクト活動”など、クラブ員の経営力向上に向けた活動の支援を行いました。



写真3 駅前マルシェの様子



写真4 マルシェで販売された農産物

# 集落営農法人における営農体制の改善と 作物栽培の収量向上

## 【普及活動のねらい・対象】

大津市南部地域には、大区画ほ場整備を契機に4つの集落営農法人が設立されています。どの組織も効率的な営農体制を目指し運営されてきましたが、法人設立から年数が経過し、役員の高齢化や構成員の減少により適切な栽培管理ができず、各作物の単収が低下していました。

そこで上記法人の中で作業の低コスト省力化を目的にドローンを導入され、構成員のオペレーター養成にも取り組む等、効率的な営農体制づくりに積極的なG法人を地域のモデルとして、適切な栽培管理による単収向上や他法人との連携による営農体制の改善に向けて活動支援を行いました。

## 【普及活動の内容】

JAレーク滋賀大津南営農経済センター担当者やTAC担当者と連携し、毎月、4法人の情報交換会を開催し、各作物の栽培管理について情報提供を行いました。また、栽培のポイントとなる時期に現地研修会(生育調査巡回)を開催しました。

4法人間で連携した営農体制の可能性を考えるため情報交換会の後に意見交換会を開催し、効率的な営農体制づくりを話し合いました。

ドローンの更なる活用として水稻実証ほを設置し、NDVIカメラ(植物の生育分布状況や活性度を示す指標数値)を利用した生育診断による収量向上を目指しました。

## 【普及活動の成果】

水稻ではドローンによる生育診断を活用し、生育の悪いほ場において局所追肥を行うことで生育改善が確認できましたが、収量は平年並となりました。大麦では後期重点施肥栽培を導入したことで、昨年度と比較して約48kg/10aの増収が確

認できました。大豆では排水溝の設置作業の遅れからほ場の乾きが遅れ、播種作業が遅れたことから生育不足が発生し、昨年度と比較して減収となりました。しかし、定期的な情報交換や現地指導の実施により排水対策の問題点がわかり、次年度の麦栽培から改善されました。今後も継続した取組を進め、更なる収量向上に向けて支援していきます。



写真1 現地研修会風景



写真2 情報交換会の様子

## ◎対象者の意見

今後も水稻の収量向上、麦の後期重点施肥栽培、大豆の基肥利用栽培について支援をお願いします。  
(G法人役員、JA担当者)

# 大豆の早播きによる収量向上を目指して

## 【普及活動のねらい・対象】

近年、大豆の栽培において、収量の低下が目立っており、増収に向けた取組が急務となっています。そうした中で、課題の一つとして、従来から播種時期が梅雨時期と重なるため、播種作業の遅れや湿害等の影響で生育が不安定になる事が多く、梅雨時期を回避する方法が求められていました。

そこで、守山市のH農園を対象に、梅雨時期を少しでも回避するために早播きを提案し、現場での実施の可能性や適応性等を調査しました。



写真 早播きほ場の様子(青立ちは少ない)

## 【普及活動の内容】

大豆の早播きは、品種によって生育が旺盛になることで倒伏やまん化、青立ちが発生したり、さや着きが悪くなり、減収することがあります。そうしたリスクを回避するため、品種は早播きに適する「ことゆたかA1号」を選定しました。また、今まで小麦収穫後、播種まで日数に余裕はあるものの、減収のリスクを懸念し、播種適期である6月下旬まで待って播種を開始されていたため、農業技術振興センターでの早播き効果の試験結果を示し、対象の不安を払拭できるよう説明しました。

## 【普及活動の成果】

指導の内容に納得され、麦類の収穫作業後すぐに大豆の播種作業に移行することで、対象が例年播種されている6月25日頃よりも1週間早く播種を開始されました。

その結果、「ことゆたかA1号」の播種作業は6月中に完了することができ、今年度については天候不順となる時期を回避することができました。生育については、早播きと慣行とで生育差はなく、適正な品種の早播きによって、懸念されていた倒伏やまん化、青立ちの発生は少なく、問題なく収穫することができました。坪刈り収量では、早播きは慣行に比べ節数が増加し、約1週間の早播きでも収量の向上が可能であると示すことができました。

以上のことから、早播きを実施することで、梅雨時期の回避とそれに伴う収量向上の見込みが認められました。今後は関係機関と連携し、同様の問題を抱える農業者への技術の普及を図っていきます。

## ◎対象者の意見

作業も早くに終わることができ、早播きをして良かったと感じています。次年度も取り組み、今年とは違う気象条件でも早播きが可能か検討していきたいです。 (H農園)

## 経営体における大麦・大豆の収量向上と連携

### 【普及活動のねらい・対象】

大津市北部地域には、大規模土地利用型個人経営体3名と集落営農経営体3組織が地域農業の中心的担い手として大麦、大豆栽培に取り組んでいますが単収が低い状況です。令和3年産の米価下落や肥料価格高騰で使用肥料の変更も行いましたが各経営体の所得確保には麦大豆の単収向上が重要なことから単収向上支援を行いました。

### 【普及活動の内容】

大麦では排水対策の徹底に加え単収向上や肥料費削減を目的に「生育後半の穂肥時期重点施肥栽培」を取り入れた栽培を行い、次年度も継続されるよう支援しました。

大豆では適期の土壌処理除草剤利用による雑草対策を支援しました。また、排水対策の徹底として、早期の弾丸暗きょの利用、明きょの増設により、播種時期のほ場過湿による播種遅れや出芽不良の改善支援を図りました。

また、情報交換会を定期的で開催し栽培技術の情報提供や経営管理等の連携取り組みが実践されるよう提案しました。

### 【普及活動の成果】

大麦では適期に防除できたことで赤かび病の発生は抑えられました。平均収量は各経営体で159kg～392kg/10aとなり、経営体間で収量差が発生しました。主な原因は、ほ場内の明きょ設置不足による部分的な排水不良に伴う生育不良や雑草繁茂による減収でした。

生育後半の穂肥時期重点施肥栽培については、6経営体中4経営体で昨年度より平均単収が増収(約17kg～60kg/10a)したことから全実施者が次年度栽培へ継続されました。

大豆は6月播種のほ場で順調に生育し、昨年度より増収しました。一方で、圃場の乾きが遅い7月播種ほ場では急な多雨によって発生した出芽不良や雑草繁茂による減収が発生しました。

情報交換会を定期的に4回開催したことで経営体間で情報共有が行われ、各自の改善点や問題点の理解が進み、適期作業の理解がより高まりました。

また、経営体間の連携が進み、大豆の収穫作業受託も行われました。

### ◎対象者の意見

今後も継続した技術支援や情報共有支援をお願いします。

(I 農園代表)



写真1 現地研修会の風景



写真2 大豆播種前研修会の様子



# 環境こだわり基準における 水稲「紋枯病」の有効な防除体系の確立

## 【普及活動のねらい・対象】

近年、管内では水稲「紋枯病」(写真)により倒伏の助長や収量・品質への影響が散見されています。特に環境こだわり農産物認証(以下、環境こだわり)基準内で作付けした場合、農薬の使用成分数が制限され、本病対策が実施できない状況にありました。そこで、野洲市で本病対策に苦勞されていた大規模土地利用型経営体2法人を対象として、環境こだわり基準内で本病対策に有効かつ実現可能な方法を実証するとともに、収量・品質向上を目指しました。

## 【普及活動の内容】

今回は農薬の使用成分数の削減が必須であったことから、ケイ酸入り資材の施用と耕種的防除による苗箱施用剤の削減や、1成分でいもち病と紋枯病の両方に有効な剤を使用した実証ほを設置しました。具体的な実証内容は下記の表のとおりです。

表.紋枯病対策の実証内容

	J法人	K法人
品種	コシヒカリ	みずかがみ
土壌改良剤	なし	ケイ酸入り資材あり
耕種的防除	なし	浮遊物の除去
苗箱施用剤	フラメトピル(成分)	なし
本田施用剤	メトミノストロビン(成分)	フルトラニル(成分)



写真 紋枯病の発生した株

※両経営体とも慣行区を設置し、慣行区では同品種で本田防除なし、箱施用剤は(株)J法人のみ実施。その他は地域の慣行栽培に準じて栽培。

また、本病対策は初期の発生を確認した際に速やかに防除する必要があることから、当課がほ場巡回を定期的に行い、初発を確認した際に速やかに防除するよう支援を行いました。

## 【普及活動の成果】

活動の結果、紋枯病対策を講じたほ場では両区とも慣行区と比べ、発生株率は同等からやや低く抑えられ、収量と品質に影響する上位葉進展株率は約1～7%と慣行区約8～25%より低く抑えられました。収量面では慣行区と比較し「みずかがみ」で同等、「コシヒカリ」で約18%増収しました。また、品質面においても、実証区のほうが慣行区よりも整粒率が高くなりました。ただ、本病対策による収量・品質向上の程度に品種間差も見られたことから、今後は品種ごとに対策を検討し、防除体系の確立を図っていきます。

### ◎対象者の意見

今年は対策を講じたこともあり、比較的紋枯病の発生が少ないように感じました。

(J法人代表)

## 新規就農者に向けた支援

### 【普及活動のねらい・対象】

大津・南部管内では、毎年30名以上の就農相談があり、その内5名程度が認定新規就農者の認定を受け、農業経営を開始されています。就農後は、就農計画の目標が達成されるよう、関係機関と連携しながら栽培管理技術や経営管理手法の習得に向けた支援を行っています。

今年度は就農1年目の認定新規就農者5名を対象として、売上目標の達成に向けて、集合研修と個別巡回を組み合わせた活動を行いました。

### 【普及活動の内容】

#### (1) 集合研修会の開催

営農活動を行う上で必要な基本的知識を習得されることを目的に、1回目は①自然災害に強い施設管理、②園芸施設共済と収入保険、③農業版事業継続計画書について、2回目は①農薬基礎知識、②GAP、③農作業安全について、関係機関の協力も得ながら集合研修会を開催しました。研修会後にはアンケートにより理解度を確認し、個別巡回でフォローしました。



写真 集合研修会の様子

また、イチゴやイチジクなど品目ごとの研修会や農薬アドバイザー講習会、農業センター主催の研修会など、対象の経営品目や状況に応じて情報提供を行い、参加誘導しました。

#### (2) 個別巡回指導

5名それぞれの経営品目について、生育状況に応じたかん水や病害虫の状況に応じた防除など、必要な栽培管理が適切に行われるように、その時期に応じた現地支援を行いました。

### 【普及活動の成果】

対象の認定新規就農者5名中2名が、1年目の目標売上を達成できました。達成できなかった対象者も、達成できなかった原因を把握でき、2年目に向けた対策に取り組まれています。

#### ◎対象者の意見

IPM(総合的病害虫管理)の考え方に興味を持ちました。

(認定新規就農者 L氏)

## 経営開始に向けた モリヤマメロンの栽培技術習得支援

### 【普及活動のねらい・対象】

モリヤマメロンは、守山市を代表する農産物のブランドですが、近年、生産者や出荷量が減少しており、新たな生産者の獲得が求められています。守山市には、平成25年からJAと守山市が協力して運営するトレーニングハウス研修制度があります。今年度はこの制度を活用する研修生を対象に、栽培技術の習得を図り、モリヤマメロン部会の貴重な担い手となるよう支援しました。



写真1 現地研修会の様子

### 【普及活動の内容】

JA、守山市役所と連携し、ほ場準備、定植、芽かき、誘引、摘果、病害虫防除、収穫の合計7回の現地研修会を開催しました。また、メロンは温湿度管理が重要であるため、JAとともにこまめな現地支援を行いました。

モリヤマメロン部会員とも連携し、栽培期間中に部会員のほ場へ行き、芽かきの方法や摘果、収穫適期の見極め方などについて、より実践的に学べる場を設定しました。



写真2 部会員から収穫適期を教わる研修生

### 【普及活動の成果】

メロンの出荷率80%を目標に定めたところ、92%の出荷率となり、目標は達成できました。ただ、果実肥大期の灌水量不足等でネット形成不良の果実が発生し、秀品率が低くなったことについては課題が残りました。

また、対象はモリヤマメロン部会に入会され、空きハウスを借りて次年度以降もモリヤマメロンの栽培に取り組まれるため、引き続き支援していきます。

### ◎対象者の意見

初めての栽培で不安が大きかったですが、適切な支援があつて助かりました。6月に収穫を迎え、収穫の喜びを味わうことができよかったです。

(トレーニングハウス研修受講生 M氏)

# 小麦新品種「びわほなみ」への 円滑な転換による収量・品質の向上

## 【普及活動のねらい・対象】

管内の小麦作付面積は1,300ha を超えているものの、平成30～令和2年産の管内平均収量は350kg/10aと全国平均419kg/10aと比べて低い状況でした。また、管内主力品種「農林61号」は品質の年次間変動が大きいことが課題でした。そこで、管内小麦生産者を対象に「農林61号」から多収で安定した品質が見込める「びわほなみ」へ円滑に品種転換が進むよう支援しました。

## 【普及活動の内容】

「びわほなみ」は収量性・製めん適性に優れ、短稈で倒伏しにくいなどのメリットがある一方、早播きすると凍霜害などに遭いやすいことや赤かび病に弱いこと、子実タンパク含有率が低下しやすいことなど栽培上注意すべき品種特性がありました。このため、当課は品種の短所を補いつつ、長所を活かし、関係機関・農業者が納得して品種転換が進むよう以下の内容で活動しました。



写真 「びわほなみ」播種前研修会の様子

(1) 研修会の開催: 関係機関とともに先進地である東近江地域を視察し、栽培方法や赤かび病の防除体系等を確認し、不安の払しょくを図りました。また、室内研修を開催し、管内で初めて作付けされた栗東市の令和4年産「びわほなみ」の生育状況や今後の栽培方針を説明しました。

(2) 実証ほの設置: 生育後半に重点を置いた施肥体系の実証ほを設置し、関係機関と共に生育調査を行い、管内の栽培状況に沿う施肥体系の確立を目指しました。

(3) 赤かび病の防除体制の構築: 関係機関と協議の場を設け、「本品種は赤かび病防除2回が必須で、県病害虫防除所より注意報や警報が発令された場合に追加防除を行う」という共通の認識を持つことができるよう活動を行いました。

## 【普及活動の成果】

活動の結果、栗東市全体の実収は451kg/10aと大幅に増収し、品質についても全量1等Aランクと最高ランクとなりました。また、試算表(表)のとおり、品種転換することで、約32,000円/10aの所得向上が見込めることを実証しました。

表 小麦「農林61号」と「びわほなみ」の経営試算表

	「農林61号」	「びわほなみ」
収入 (A)	72,615	120,422
支出 (B)	28,917	44,471
所得 (C) = (A) - (B)	43,698	75,951

※農業者の聞き取りより作成  
 ※令和3年産「農林61号」: 250kg/10aと令和4年産「びわほなみ」: 563kg/10aを比較  
 ※収入に販売代金と畑作物の直接支払交付金、水田活用直接支払交付金、産地交付金を含む  
 ※支出に種苗費、肥料代、防除費、乾燥・調製費等を含む  
 ※消費税、施設・農機具代などの減価償却費を含まない

## ◎対象者の意見

「びわほなみ」へ転換し、初めて概算金でプラスになりました。品種転換して良かったです。  
 (生産者)

## 参入法人の経営安定を核とした産地活性化

### 【普及活動のねらい・対象】

さづかわ果樹生産組合(平成4年設立、ナシ栽培面積約7ha)は、令和2年度に法人による参画があり、今年度の栽培面積は全ナシ園地の半分超を占めています。今後も面積拡大が予定され、さらには産地における選果や販売等を主に担う予定となっていることから、同法人の経営安定が産地の維持・拡大に直結する状況となっています。

こうした状況を受け、同法人に対してナシ栽培に関する栽培管理や産地運営、また新技術導入に関する支援を行いました。

### 【普及活動の内容】

#### (1)栽培管理・産地運営支援

同法人は果樹栽培経験が浅く、本格的に大面積で栽培する初年度であったため、事前に栽培・防除計画を検討し、ナシの生育に合わせて計画のとおり作業が進むよう、現地指導を行いました。

また、産地全体で円滑な選果・販売が取り組めるように反省会の開催を誘導し、課題共有を図りました。

#### (2)新技術導入支援

昨年度に定植した「香麗」について、新技術「ナシ樹体ジョイント栽培」の導入に向けた隣接樹との接ぎ木研修を行いました。

また、今年度も同技術を用いた新品種「凜夏」等への改植を2園地、約65aで計画されており、そのために必要な大苗育苗の実践支援を行いました。



写真1 課題共有のための反省会



写真2 技術研修と秋期の接ぎ木部分

### 【普及活動の成果】

活動の結果、ナシ栽培に関する技術を習得され、新技術や新品種の導入が進みました。

また、青果販売の他、新たにナシ狩りによる誘客や加工品の販売が行われ、今年度のフルーツランド直売所を通したナシ販売額は、昨年度の2倍近くにまで増加しました。

### ◎対象者の意見

販売金額は増加しましたが、まだまだ拡大の余地があると考えています。産地で一体となっ  
てさらなる活性化を図っていきたいです。(N法人代表者)

## モリヤマメロンの出荷率・品質の高位平準化

### 【普及活動のねらい・対象】

モリヤマメロン部会は、昭和55年に設立された歴史ある部会で、今年度は部会員数21人、面積約3haで栽培されています。

モリヤマメロンは、直近2年、出荷率や秀品率に部会員間での差が大きく、特に、若手生産者において、出荷率と秀品率の向上が求められていました。

そこで、部会の平均出荷率90%、平均秀品率80%を目標に、栽培管理技術の向上に取り組みました。



写真1 温度計の設置

### 【普及活動の内容】

昨年に引き続き、若手生産者4人とベテラン生産者2人のハウスで温度・湿度・地温を測定し、定期的に状況を共有しました。また、今年は気候の年次変動が大きく、生育状況、土壌病害の発生状態に応じた遮光資材の展張や灌水作業ができるように促しました。



写真2 出荷前のモリヤマメロン

### 【普及活動の成果】

データに基づく適切な管理ができるようになったことから、令和4年産モリヤマメロンは出荷率91%、秀品率71%となりました。秀品率については目標に届きませんでしたでしたが、秀品の内訳では「プレミア」というより高品質の等級の割合が令和3年の12%から令和4年は45%に大きく改善しました。また、単価の低い優品が令和3年は約7,000個ありましたが、令和4年には約3,700個まで半減しました。これらのことにより、モリヤマメロン部会の販売高は、3年ぶりに1億円を突破しました。

### ◎対象者の意見

出荷率の目標を達成できたことはよかったです。秀品率はもう少し改善したいです。特に、糖度16度以上の果実の割合を高める栽培管理を追求したいと思います。モニタリング機器については、自ら導入する部会員も出てきており、秀品率を上げるためにも有効に活用していきたいと思っています。

(モリヤマメロン部会長)

## イチゴの共同販売組織の安定化

### 【普及活動のねらい・対象】

大津・南部地域では、毎年イチゴ経営での新規就農者がいます。一部の地域では、直売所での販売が競合し、売りにくい状況が発生しています。このような状況を受け、昨年度、市場出荷向けの共同販売組織「びわこいちご共同販売グループ」を6戸で立ち上げました。

今年度は、このグループが活動を継続でき、安定的に市場出荷できるよう、体制整備と栽培支援を行いました。



写真 目合わせ会の様子

### 【普及活動の内容】

グループ活動が継続できるよう、それぞれの役割についてグループ員やJAと話し合いを行いました。また、出荷に向けた目合わせ会の開催など定期的に集まりました。

さらに、イチゴを継続して安定的に出荷するため、グループ員には温度、湿度、CO<sub>2</sub>などが測定できる機器の設置と栄養診断を行い、生育状況を数値化しています。

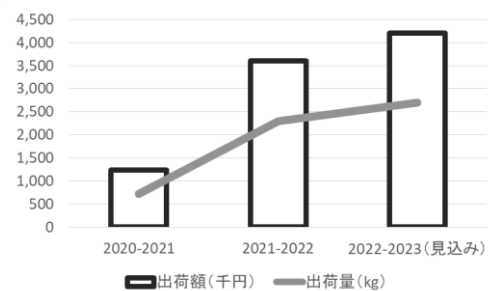


図 びわこいちご出荷額・出荷量推移

出荷量の増加に向けては、グループ員と相談した結果、グループ員を増やすことで出荷量を増やしていくこととなったため、びわこいちごの取組を管内および高島地域のイチゴ生産者に周知しました。

### 【普及活動の成果】

グループ活動の継続に向け、グループ員、JA、当課がそれぞれ役割分担することで、今後も取組を継続できる状態となりました。グループ員は1人増加し、7人での取り組みとなりました。また、次シーズン以降はさらに2人増加することが決まっており、大きな集団になりつつあります。

### ◎対象者の意見

年々、出荷量・グループ員が増える状況にあり、いい活動となっています。また、今年度から取り組んでいるハウス内環境の測定と栄養診断は、安定出荷に向けた重要な要素であるため、今後も支援の継続を期待します。  
(グループ代表 O氏)

## 草津メロン部会生産者への栽培技術支援

### 【普及活動のねらい・対象】

草津メロン部会は草津市北山田地域で昭和57年に設立され、今年度の生産者は23戸、面積は約4haとなっています。JA部会生産者の若返りが進みつつあり、新規参加者が収益確保できるよう、栽培上の課題の抽出と、技術習得に向けた支援を行いました。



写真 見学研修の様子

### 【普及活動の内容】

#### (1) アンケートによる課題抽出

ベテラン生産者、JA営農指導員と協力のもと栽培期間中の管理状況を確認するアンケートを作成し、各生産者を巡回して聞き取り調査を実施し、栽培上の課題を抽出しました。

#### (2) 新規参加者の技術習得に向けた支援

新規参加者がベテラン生産者のハウスを訪問し学習する機会を設けました。生産者からの栽培管理の説明ののち、参加者より初期の温度管理や、灌水タイミングの目安、自ハウスで発生している病気や障害についての質問等にベテラン生産者、JA 営農課職員、当課より回答しました。また、互いのハウスを巡回して、管理の進み具合や生育状況を確認してもらいました。

### 【普及活動の成果】

新規参加者の多くでは場準備期間が十分でないことによる、作付前土壌水分の不足、地温確保が不十分な事が確認され、そのことが初期生育の不良の原因となり、着果が不安定となることが分かりました。また、見学研修を通じて、株の草勢を自ら判断できる生産者が増えました。今後は、次作栽培開始前の各生産者向けの説明にて改善点を伝え、栽培の改善を支援するとともに、栽培期間の研修会も引き続き開催する予定です。

### ◎対象者の意見

他生産者の情報が参考となりました。次作で収量が確保できるよう、栽培管理を見直したいです。  
(生産者)



# 吉川中瀬地区の畑地賃借条件の明確化

## 【普及活動のねらい・対象】

野菜の主産地である野洲市吉川中瀬地区において、地域の耕作者情報の明確化と、畑地の貸し借り条件の目安を設けることで、畑地を貸し借りしたい人が交渉相手を見つけやすくすることを目標に、「人・農地プラン」の策定支援を行いました。

## 【普及活動の内容】

地区内での畑地の貸し借りが進みやすい仕組みを作る活動を行いました。

### (1) 現況地図の作成と修正

自治会が所有する地権者・耕作者情報に、地区の農業者から得た地権者や耕作者が変わっているほ場の情報、畑の管理情報や構築物の設置情報を付加して、現況地図案の作成を支援しました。

図 作成した吉川中瀬現況地図

### (2) 標準借地料金の策定

畑にかかる賦課金の詳細を自治会の聞き取りを通じて調査し、実際に畑を借り受けている農業者から耕作者の負担実態も調査しました。調査をもとに、どの費目を貸し手と借り手のどちらが負担するのか、いくら負担するのかを整理し「標準借地料金内規案」の作成を支援しました。

### (3) 人・農地プラン策定委員会の開催

策定委員会を地域で組織し、作成した現況地図と標準借地料金をもとに「人・農地プラン」を検討し原案の策定を支援しました。

## 【普及活動の成果】

今後、吉川中瀬地区の畑地の貸し借りの窓口は吉川自治会が行うことを地域に明示するとともに、標準借地料金内規を自治会事務所に貼り出すことを吉川農業振興組合で決議する予定です。このことにより吉川中瀬地区の畑地流動化が進みやすくなることが期待されます。

### ◎対象者の意見

賦課金の種類と負担の考え方を委員会で話し合っ、初めて農家間の考え方に食い違いがあることを(普及の支援を通じて)認識しました。(人・農地プラン策定委員会代表者)

## 特産物野菜生産を阻害する 野生鳥獣総合対策

### 【普及活動のねらい・対象】

これまで大津市が主体となって「近江かぶ」選抜育種を継続してきています。また、JAでは収穫期にイベントを実施し、大津市がこれを支援するなど関係機関が連携して「近江かぶ」の消費者認知度向上に努めてきました。

現在「近江かぶ」の栽培は栗原集落で行われていますが、昨年度はカラスによる引き抜きと中型哺乳類による被害で4割程度の手直しを強いられています。集落では侵入防止柵の設置や追い払い活動が続けていますが、依然として中型哺乳類や鳥類による被害には苦慮していました。そこで加害獣種を特定のうえ対策を実施し、前年度を上回る「近江かぶ」収穫量をあげることを目標にしました。

### 【普及活動の内容】

近江かぶ栽培予定ほ場において、野生動物の加害状況についての調査とトレイルカメラを用いた野生鳥獣の観察により加害獣の特定と行動の把握を行いました。

加害獣を特定し、侵入防止柵の補強、加害獣の捕獲、カラスの加害防止策で総合的な防除対策を推進することにより収穫量の確保を目指しました。

### 【普及活動の成果】

調査の結果、昨年度加害していた野生獣は、サル・キツネ・タヌキ・カラスがあることがわかりました。トレイルカメラには侵入防止柵外でサルが、柵の内部ではタヌキの行動が確認されました。

侵入防止柵はサルに対しては良好に管理されていましたが、タヌキの侵入で掘り起こしがありました。野生獣の行動状況は現地と情報を共有し、ほ場の点検を行なって侵入経路とおぼしきポイントは対策を講じていきました。カラスについては黒色防鳥糸の展張に効果があり被害はなくなりました。現在のところほ場に侵入しているサルはおらず、近江かぶの被害はありません。これにより、近江かぶの収量は2t/10aとなり、昨年度を上回る見込みです。



写真 集落に出没するサル群

### ◎対象者の意見

野生鳥獣対策には手応えを感じ、栽培に問題はありませんでした。今後は新規需要を探りながら、近江かぶの生産と販路を拡大したいです。（生産者）

# リンドウ栽培技術の習得支援

## 【普及活動のねらい・対象】

大津市葛川地域まちづくり協議会特産育成部会は地域活性化の一手段として令和元年にリンドウを定植され、昨年からは花き市場を経由して花束加工業者へ出荷しています。定植して3年目を迎える今年は株が大きく育ち、一株からの出芽数が増える一方で、枯れる株も発生してきました。このような状況の中、生育状況に応じた栽培管理を実践し、出荷につながるように支援しました。

## 【普及活動の内容】

### (1) 個別巡回と集合研修会による技術習得支援

一株からの出芽が多いと、茎が細くなり、曲がったりして、花束加工に適さない品質になります。このため、株の大きさに応じて細い茎を取り除き、また、曲がりを防ぐため、生育に応じてフラワーネットを上げるタイミングを助言しました。

また、当地域の土壌は保肥力が弱く、定期的に追肥を行いますが、株元に固形肥料を置肥すると、肥料焼けと考えられる症状が発生したため、手間はかかりますが、株元から離れたマルチの下に施肥されるように見直していただきました。



写真 リンドウ研修会の様子

### (2) 市場出荷に向けた支援

市場出荷を増やすため、市場担当者を栽培ほ場に招き、花束加工業者が希望する品質についてお話を聞く機会を設けました。また、市場出荷は、予めおよその出荷数量を提示することが望まれているため、JA担当者とともに、収穫見込み本数を栽培ほ場で把握しました。さらに、各生産者を個別訪問し、市場出荷と直売による出荷販売を提案しました。

## 【普及活動の成果】

枯れた株が多かったことや開花が揃わなかったため、切り前の揃った一定本数が必要な市場出荷は目標の6,000本を下回り、1,570本となり、直売所や花屋への出荷は目標の4,000本を上回り、5,156本となりました。

また、来年からは緩効性肥料を利用した追肥回数の削減による省力化を提案したところ、生産者4名に実施していただくことになりました。

## ◎対象者の意見

栽培面では大変なこともあります。移住されてきた方2人と協力しながら栽培ができ、お盆時期にリンドウのパック花を直売所へ出荷できました。 (部会員 P氏)

# 全国初の「グリーンファーマー」認定

## 【「グリーンファーマー」とは】

令和4年11月に(有)クサツパイオニアファーム中山欽司氏と中道農園中道唯幸氏が全国初となる「グリーンファーマー」の認定を受けられました。これは、環境負荷の低減に取り組む生産者が「みどりの食料システム法」や「滋賀県みどりの食料システム基本計画」等に基づき作成した環境負荷低減事業活動実施計画を滋賀県知事が認定した生産者のことを指します。今回認定された方々は、いずれも県内で最大級のオーガニック農業を実践され、オーガニック近江米の取組にも当初より御協力いただいている方々です。

## 【グリーンファーマーとなられた生産者のご紹介】

### ○草津市 (有)クサツパイオニアファーム】

水稲と大麦栽培において、鶏ふん散布と、機械除草を実施されます。また、水稲栽培ではもみ殻堆肥の散布を実施し、機械除草の実施回数については、水稲、大麦ともに回数を増やして実施することで化学肥料、化学農薬の不使用栽培に取り組まれます。

今後は水稲、大麦ともに有機JAS認証面積の拡大と収量の向上を目指されます。



写真1 (有)クサツパイオニアファーム中山欽司氏

### ○野洲市 中道農園

水稲栽培において、自家製のもみ殻ぼかし肥料やもみ殻くん炭の施用による土づくり、土壌診断結果を活用した施肥設計による化学肥料の不使用と、機械除草や雑草対策のための水管理、ケイ酸資材の投入、畦畔除草の実施、色彩選別機の利用を行うことで化学農薬の不使用に取り組まれます。

今後は水稲の有機JAS認証面積の拡大と収量の向上を目指されます。



写真2 中道農園 中道唯幸氏

# 滋賀県育成イチゴ品種「みおしずく」 ～令和4年12月から試験販売を実施～

## 【背景】

滋賀県では、近年、新規就農者を中心にイチゴ栽培が増加しており、優良品種が求められていました。そこで、農業技術振興センターにおいて品種育成に取り組み、5年の歳月をかけて選抜しました。この品種の愛称は「みおしずく」です。

令和5年産から本格的な栽培が始まりますが、それを前に、今年度は実証栽培として、当管内で2戸の生産者が栽培に取り組みされました。



写真1 みおしずく栽培の様子

## 【新品種「みおしずく」について】

### (1) 品種特性

果実は明るい橙赤色で、「章姫」と比べて果実は硬めです。収穫開始時期は「章姫」と比べて早く、11月下旬頃から始まります。味は、酸味があり、糖酸比※は良食味といわれる16～17です。

栽培にあたっては、「章姫」と比べて吸肥・吸水力が高いため、「かおり野」と同等の高い培養液濃度で管理することが必要です。

※「糖酸比」とは、糖度と酸度のバランスを示す指標のこと



写真2 量販店でのみおしずく販売の様子

### (2) 生育・販売状況

実証ほのみおしずくは、順調に生育し、12月上旬頃から収穫が始まりました。1月中旬には第2次腋果房が着色し、連続収穫が見込めます。販売については、資材や規格を県内で統一、市場を通じて県内量販店で試験販売が行われています。

今後は、「みおしずく」を活用し、直売と並ぶ販売の柱として、市場出荷型の県一産地を目指します。それに向け、生産安定のための栽培研修会などを開催していく予定です。

章姫		みおしずく	
色	一般的な赤色	色	明るい橙赤色
味	甘みが強い	味	適度な酸味と甘み
香り	ほのかに甘い	香り	フローラルで芳醇

表1 「章姫」と「みおしずく」の違い

# 「人・農地プラン」から「地域計画」への 円滑な移行を目指して

## 【背景】

近年の農業生産者の高齢化、後継者不足および集落が抱える人と農地の問題を解決するため、「人・農地プランの実質化」が推進されてきました。次年度からは、「人・農地プラン」の法定化に伴い、各地域において「地域計画」の策定・移行することとなっています。そのため地域での話し合いにより、目指すべき将来の農業のあり方と農地利用の姿を明確にすることが必要となってきます。そこで、当課では、各市での「地域計画」の策定にあたり、関係機関内での調整等が円滑に進むよう支援を行いました。

## 【活動内容】

市主導による「地域計画」の策定に向けて、さらに具体的に話し合いが行われるよう、当課では「地域計画推進会議」の開催を支援しました。「地域計画推進会議」では、従来の戦略会議のメンバーの他、農業委員会事務局や農地中間管理機構などを新たに加え、「地域計画」の区域の設定や今後の動向についてより深い議論を行うことを目的としています。



写真 地域計画推進会議の様子

管内では集落営農組織が少なく、土地利用型の大規模担い手が複数の集落にわたって耕作している地域が多く存在しています。そこで、各市に対して、地域計画策定マニュアルに沿って地域計画の策定の支援を行いました。市によって策定手法は様々で、早い地域では12月中に1回目の「地域計画推進会議」を開催され、「地域計画」の構成メンバーの役割分担や策定のスケジュール案が関係者に提示されました。また、「人・農地プラン」の範囲が複数集落、学区といった広域となっている市もあることから、農業者への説明をどのように行うのか、地域計画の区割りをどのようにするのが妥当かについても検討し、アドバイスを行いました。さらに、すでに集積が進んでいる集落をモデル集落として選定し、その集落を中心に地域計画策定を波及させていく手法についても提案を行いました。

当課では令和6年度末までの地域計画策定に向けて各関係機関との連携をより一層図っていきます。

# 栗東チャレンジ農業塾 イチゴコース開講

## 【背景】

栗東市では農業者の高齢化や減少、都市化等により、農業後継者の確保が課題となっていました。

そこで、市、JA、農業委員会、県などの関係機関が連携し、栗東市の農業振興と新規就農者の育成等を目的に、令和2年度に「栗東チャレンジ農業塾」が開講されました。講座では農産物の生産に必要な知識や技術を学べます。

今年度は新しくイチゴコースが開設され、5名(1 法人、2個人)が受講されました。



写真1 収穫間際のイチゴ

## 【講座の内容について】

全6回の講座の開催日と内容は以下の表のとおりでした。現地での指導については、イチゴ栽培の経験が豊富な指導農業士の方を中心に進めていただきました。当課は、座学での講師や現地で補足説明等を行いました。

	日時	内容
第1回	8月3日(水)	開講式、座学(イチゴの生理生態など)
第2回	9月22日(金)	定植準備、定植、遮光資材の展張など
第3回	10月18日(火)	葉掻き、ランナー・わき芽除去、マルチ張り
第4回	11月7日(月)	摘蕾・摘果、天敵放飼、ミツバチ導入
第5回	12月15日(木)	収穫・調製、糖度測定、株整理
第6回	1~2月(予定)	視察研修



写真2 講座の様子(12月15日)

受講生は開講日以外もハウスに通われ、日々の作業を経験されました。12月15日の収穫作業の実習後には、試食と併せて糖度も測定されました。先端の糖度が15度以上あり、受講生は自身の栽培したイチゴの味に満足されている様子でした。受講生の中には次年度以降に施設イチゴの経営開始を予定されている方もあり、今後の栗東市産イチゴの生産振興が期待されます。

# 環境にやさしい栽培技術と省力化技術の定着を目指して みどりの食料システム戦略

## 【背景】

食料・農林水産業の生産力向上と持続性との両立をイノベーションで実現するため、令和3年5月、国において「みどりの食料システム戦略」が策定され、その推進に向けた事業が今年度から実施されています。

大津・南部管内では、「グリーンな栽培体系への転換サポート事業」により、以下の2つの取組が行われていますので紹介します。

## 【活動内容】

### (1) 琵琶湖もりやまフルーツランドグリーン転換協議会

守山市北部のナシ園において、グリーンでスマートな栽培体系の転換を図ることを目的に、天敵製剤による化学合成農薬の削減とロボット草刈機による省力化の実証を行いました。

天敵製剤は、ナシの主要害虫であるハダニ類を捕食するミヤコカブリダニをほ場に放飼するもので、県内ではイチゴ栽培で普及しているものの、ナシ栽培では初めての使用となります。

ロボット草刈機は、家庭用ロボット掃除機のように指定エリア内を自動走行して除草作業を行います。本県のナシ園の多くは電源を有しませんが、同機は太陽光パネルにより充電できるため、様々なほ場での活躍が期待されます。



写真1 ナシ園に設置された天敵製剤



写真2 ナシ園を除草するロボット草刈り機

### (2) 愛郷米生産組合協議会

野洲市の愛郷米生産組合協議会では、有機農業を目指し、有機質肥料の利用と乗用型機械除草機による除草作業を組合せた栽培体系の実証を行いました。

有機農業は、収量や品質が不安定なことや労働負荷の高さが課題となりますが、有機質肥料の施用量や除草機の使用時期を検討し、安定生産・省力栽培を実現できるよう取組を進めていきます。



写真3 乗用型除草機による水田雑草の除草



# 経営支援アドバイザー派遣制度の活用

## 【背景】

農業経営の高度化を背景に、多様な経営課題に対して経営相談・診断や専門家派遣等の支援を実施することを目的に、今年度より県に「しがの農業経営支援センター」を設置しました。

この制度を活用することで、より高度な普及指導活動の展開が可能となることから、積極的に制度が活用されるよう活動を行いました。

## 【活動内容について】

### (1) 制度の周知と活用

先進的農業者育成確保事業のカウンセリング活動を通じて、18経営体に制度の周知と、経営体に応じた活用の提案を行いました。また、新規就農者、法人化や経営継承を考えている個人や組織に対しても制度の周知を行いました。

### (2) アドバイザー派遣の実績

今年度は3経営体と1組織に対して、のべ9回アドバイザーの派遣を行い、代表交代に伴う組織改革や現実的な就農計画の組み立て支援、集落営農組織の法人化支援などを行いました。

### (3) アドバイザー派遣を活用した活動事例

カウンセリング活動を通じて、今後の経営展開について相談を受けた法人に対して、ブレインストーミングによる課題分析の実施を提案し、課題の整理を進めました。

整理した課題に従い、目標を代表理事と検討した結果、自発的に課題を見つけて、実行できる組織に作り替えていくという課題を普及と対象の法人とで共有しました。

そこで、組織改革に詳しいアドバイザーの派遣を通じて支援を行った結果、業務分掌表の作成による組織体制の見直しと組織内に委員会を設置することが決まり、目標に向けた取り組みを継続しています。

今後もアドバイザー派遣制度を活用しながら、多様な課題を有する経営体から頼られる普及活動を目指します。



写真 社員会議でブレインストーミングを実施

## 表彰事業 受賞者の紹介

### 滋賀県農林水産表彰※ 功労賞 栗東市 中島 豊勝さん

昭和51年、27歳で就農後、いち早く露地野菜から施設野菜へ転換するとともに、産地発展のため青果産直センター誘致に取り組み、契約産地としての地位確立に尽力されました。栽培面では、土づくりや有機質主体の施肥、防虫ネットや粘着板など減化学農業技術を導入され、環境に配慮した農業にも取り組まれています。

平成22年からは栗東イチジク生産組合長や滋賀県果樹連合組合のいちじく部会長や理事長を歴任され、滋賀県の果樹振興に貢献されました。

また、昭和60年に滋賀県指導農業士として認定され、数多くの滋賀県立農業大学校や農業高校の学生・生徒の研修受入れや青年農業者組織への助言指導など担い手の育成に貢献されてきました。平成11年からは近隣の授産施設の利用者の受け入れを開始されるなど、農福連携に先駆的に取り組まれました。これまでのご自身の農業を振り返った時、農福連携に取り組んだことが良かったと話される中島さん。働きに来てくれた方が成長し、他の仕事で頑張っている姿を見ることが何より嬉しいと話しておられます。



写真1 中島豊勝さん

### 滋賀県農林水産表彰※ 奨励賞 大津市 加地 玄太さん

平成31年に有機農業を行う「ひらの自然菜園」を開園し、野菜で農を伝えることを目指して農業経営を開始されました。マルシェなどを通じて県内ホテルへ販路を拡大したり、コロナ禍以降は、個人契約の野菜セットの販売を開始するなど、時世に合わせた経営を実践されています。

また、大津地域の青年農業者クラブ「季楽里」に加入し、小学生を対象とした田植えや稲刈り体験を通じて、食育活動に取り組むとともに、大津市蓬萊地域を中心とした農福連携にも先駆的に取り組まれています。「今後も農の魅力を届けられるよう頑張ります。」と意欲的に話されています。



写真2 加地玄太さん

※知事が本県農林水産業の健全な発展と活性化を図るため、長年にわたり農林水産業の分野で県勢の発展と明るい地域社会づくりに取り組んできたことにより広く県民の模範として特に推奨すべきと認められるものおよび農林水産業の担い手としてその将来が期待されるものを表彰(滋賀県農林水産表彰要領より抜粋)

# 発信情報

## 【大津・南部の農業】

農業と農政に関する情報をお知らせする当課の  
 広報紙「大津・南部の農業」(A4版4ページ、  
 約 15,000 部/回)を年間3回発行しています。  
 詳細は当課のホームページをご覧ください。



## 【普及現地情報】

当課が取り組む普及指導活動を「普及現地情報」として下記のホームページで  
 発信しています。今年度は 14 件の記事を掲載しました(1月27日時点)。



当課HP:

<http://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/shigotosangyou/nougyou/ryutsuu/18662.html>

No.	発信日	題名
1	4月19日	県内初・ナシ新技術 樹体ジョイントへの仕立て実演！！
2	6月 2日	大津地域4Hクラブ 小学生への田植体験を開催
3	6月15日	ナシ園でのグリーンでスマートな栽培体系への転換に向けた実証始まる
4	8月 2日	大津地域4Hクラブ 2年ぶりの県外視察！SDGsを学ぶin石川
5	8月29日	生産者の課題解決に向けイチゴ研修会を開催
6	10月14日	小麦新品種「びわほなみ」播種前研修会を開催
7	10月20日	子実コーン刈り取り実演会の実施
8	10月20日	大津地域4Hクラブ 稲刈り体験による食育活動を開催
9	10月26日	イチゴの収量向上に向けて生育診断支援を開始
10	10月26日	「カイゼン」研修会を実施
11	11月 9日	はなふじ米の増収へ向けてヘアリーベッチ栽培の改善
12	12月 1日	田上発起人会の先進地視察を支援
13	1月24日	イチゴ加工出荷説明会を開催
14	1月26日	栗東チャレンジ農業塾

## 【Facebook】



当所の活動や管内の魅力的な農業・農村情報を Facebook  
 「Face to アグリ大津・南部」で発信しています。普及現地情報  
 よりも身近な内容になっております。ぜひ、ご覧ください。

当所 Facebook: <https://www.facebook.com/facetoagri.o.n/>



令和4年度 大津・南部地域普及活動実績集

令和5年(2023年)3月発行

【編集・発行】

大津・南部農業農村振興事務所農産普及課  
滋賀県草津市草津三丁目 14-75

TEL 077-567-5421~23

FAX 077-562-8144

Mail [ga35@pref.shiga.lg.jp](mailto:ga35@pref.shiga.lg.jp)

【印刷】

有限会社柳印刷店